



この展覧会は、山岸信郎（1929-2008）が開廊した画廊の記録である。1969年田村画廊、75年真木画廊が開廊し、様々な名称変更を繰り返し、2001年に凡てを閉じるまでの展覧会風景写真、展覧会目録、関連資料が展示された。

写真は安齋重男（66枚）と森岡純（60枚）が入り混じる。作品、作者、パフォーマンスの様子、スナップと多様だが、判別が不可能な写真もある。展覧会目録は年号とタイトルのみとシンプルで、資料は手書きのコピーが主だ。

ここには莫大な情報量が含まれている。そのため、一日で認識することは不可能である。個々の意義、関連性、画廊の意図、問いかけなど、一筋縄には行かない。美術研究者であっても何十年の歳月が必要となる貴重な資料展だ。

事の発端は竹内博が成就した展覧会と同名の著作（2013年11月/竹内精美堂）にある。竹内は敬意を込めて山岸が書き散らした文章を丹念に集め、編纂した。整理した資料は国立新美術館に収められ、今回、ここに貸し出された。

著作にある山岸の言葉を追うと、山岸の期待と苦悩がありありと甦る。それを突き破ろうとする山岸の勇気と挑戦には頭が下がる。それは過酷な時代に限定されるのではない。山岸は常に時代と闘っていた。美術の場所を探した。

特に重要なのは「批評」の在り方に対する考察だ。山岸は現代美術とは批評があって初めて作品が成立し、新たな世界へ飛び立つことを知っていた。批評家と対話し、自らも批評し、批評とは何かを考え続けていた。

確かにそのような山岸の意図を明確にする展覧会になっている。しかし資料の表紙がなければ、ここはモノクロームの世界＝過去の墓場である。一つの時代が終わった、田村画廊は過去の遺物であるという印象が発生する。

訪れた者は自分の歴史を探り、知り合いの名前を探すのであろう。それは山岸の想いと大きく外れてしまう。時代背景、社会との関連性は不可欠だ。何よりも山岸の思想が今日にどのように生き続けるかを提示すべきであろう。

